

国士館を支えた人々

宮島詠士（大八）

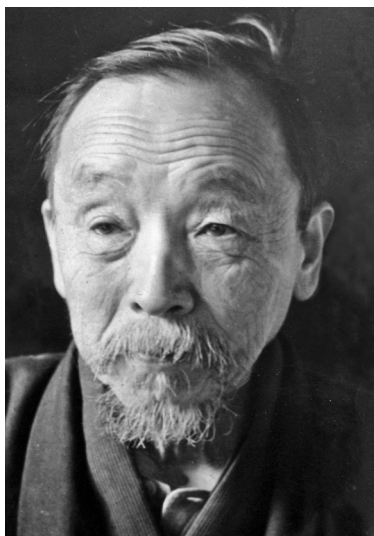


写真1 宮島詠士（大八）
（中国語学校善隣書院所蔵）

国士館の草創期には政界、財界、文化・教育界から多くのの人々による支援があった。漢学者で書家としても数多くの作品を遺した宮島詠士（写真1）もそのうちの一人である。私塾「国士館」の設立を宣言した「国士館設

漆畑真紀子



立趣旨」（本誌一三九～一四六頁全文掲載）に、詠士も支援者の一人として名を連ねている。

宮島詠士は、一八六七（慶応三）年一〇月二〇日（勲位記では一〇月一四日）、米沢城下猪苗代片町に米沢藩士である父宮島誠一郎の次男として生まれた。諱は吉美、通称大八、昂齋きょうさいと号した。長男が夭折したため、實際は嫡男として育った。詠士の能筆は幼児期から祖父に欧陽詢（唐代の儒家、書家）の臨書を課せられたことによるとされている。祖父一郎左衛門吉利（号を一瓢）は、米沢藩の三手組五十騎の長手御槍組頭（二〇〇石）で、御筆吟味方を勤め、書道に精通していた。

父の宮島誠一郎（号を栗香、養浩堂）は、米沢藩校の興讓館助教に二九歳で就任した英才で、戊辰戦争時には勤皇の大義の下、奥羽列藩同盟成立に尽力した人物として知られる。その際作成した建白書の草案では、大局的

見地から戦争を回避し和平を結ぶ自論を展開、東北諸藩の賛同をとりつけ副使として江戸に上り勝海舟の添削を仰ぎ、英国船に乗船、横浜から兵庫へ向かい、京都にいた土佐藩主山内容堂の手を経て建白書を朝廷に進達する重責を果たした。以来、生涯勝海舟を兄事し、そのアジア観は海舟の影響が多分に見られる。

誠一郎は一八七〇（明治三）年に建白受理機関である待詔院下局出仕となり明治政府官界に登場し、左院大議生、修史館御用掛などを歴任した後、一八九六（明治二九）年に貴族院議員に勅撰された。漢籍への造詣が深く中国文化に精通し、さらなる夢を詠士に託し、中国との善隣友好の道を歩ませたのも、ほかならぬ父誠一郎であった。

詠士はそんな父の政府出仕に従い、一八七二（明治四）年に米沢から母とともに上京した。一八七七（明治一〇）年一一歳の時、以前から薫陶を受けていた勝海舟の門に入り、一四歳で清国公使随員の黄遵楷（ウンカイ）につき中国語の音韻を学んだ。一八八〇（明治一三）年二月、アジア主義的政治団体である興亜会が設立され、活動には誠一郎をはじめ旧幕府の関係者が深く関与していた。興亜会を中心的活動は支那語学校の運営にあった。詠士はこの興亜会支那語学校で一五歳より中国語を勉強した。そ

の二年後、一八八二（明治一五）年五月に財政上の理由から支那語学校が閉鎖されると、そこで教鞭をとっていた清人教師張滋昉と在籍の生徒一九名が東京外国語学校漢語学科へと移籍された（『東京外国語大学史』東京外国語大学、一九九九年）。このとき、「男装の麗人」川島芳子の養父としても知られる川島浪速や、本誌一九一九四頁で取り上げた国士館初代学長長瀬鳳輔とも同窓となった。余談だが、後年、長瀬の死にあたり、『国士館々報』第五卷第二号に「長瀬氏の追憶」と題して、次のような詠士の談話が掲載されている。

余は元の東京外国語学校に在りて長瀬氏と同窓の關係にありしも、在校中は遂に交際を結ぶの機なく、同氏が独逸留学を終へ帰朝以來始めて親交を訂するに至れり。氏は謹嚴にして熱情の人なりしを以て、交りを重ぬるに随ひ互の間に情義益々厚きを加へたり。而して氏が学者として真面目の態度は夙に余の敬重を受け、多方面に大なる裨益を与へられしは周知の事也。（後略）

一方の川島浪速は無類の暴れん坊で、詠士は随分とひどい目にあったらしい。こんな逸話が残っている。

ある日、校庭で遊んでいるうちに二人が喧嘩した。

もちろん川島の腕力にはかなわない。宮島（詠士）は散々殴られ鼻血を出して仆れ、泣きだした。川島は、「鼻血ぐらいいで泣くやつがあるか」とまた殴つた。すると宮島は、「おれは殴られて泣くのぢやない、君が友人のおれを鼻血が出るまで殴る―その残酷無情の心根が情けないし、哀れでならないのだ」といつた。それをきいて川島も、「そうか、おれがわるかつた」と乱暴を謝し、扶け起して泥を払つてやつた。（石川順「宮島大八と張廉卿」『海外事情』第五卷第一〇号、拓殖大学海外事情研究所）

以来生涯にわたって親しい友情を続けたという。詠士の温和純真な人柄が偲ばれる話である。

一八八五（明治一八）年、東京外国語学校が廃校となつて東京商業学校に吸収されたのを期に、同期生であつた長谷川辰之助（後の二葉亭四迷）とともに退学するが、詠士はその後経書を学び、四書を暗誦するなど古典の勉強に励んだ。そのころ、父誠一郎のもとに、懇意にしていた清国公使黎庶昌から張廉卿の文集二冊と廉卿書の蘇東坡詩幅が贈られた。詠士は「当時私は十七歳であつ

たが、その書を見て非常に愉快に感じ、又その文集中の黎氏に与うる書を読んで大いに感動」（魚住和晃『宮島詠士―人と芸術―』二玄社、一九九〇年）したという。こうして廉卿へ入門するべく清に渡る志を立てた。

一八八七（明治二〇）年四月、二一歳の詠士は黎庶昌からの紹介状を携えて、保定（現河北省中部）にある蓮池書院に留学する。張廉卿（裕釗）は清朝末期に活躍した儒学の大学者で詩文に優れ、漢魏六朝の諸碑など石刻文字を研究する碑学を大成し、その鋭さを書に表現するという書風を確立した人物である。また、蓮池書院に外国人の入学を容認した最初の山長（学長）であると考えられる。詠士は蓮池書院山長張廉卿の下で書の研究に専念するとともに、中国の歴史や文物に親しみ、修行を重ね、自己形成を行った。一八八九（明治二二）年いったん帰国し、三年後に従妹にあたる保科芳子と結婚、その半年後、再び渡清したが、一八九四（明治二七）年に師張廉卿が死去、同年日清戦争の勃発により、悲嘆のうちに帰国した。

帰国後、詠士は中国語の権威として東京帝国大学漢学科の講師や東京外国語学校の主任として教鞭をとったが、四、五年して辞任する。官の禄を食むことを徹底して嫌った詠士は、これ以後、政界の陰の助言者としての

立場を守った。中国語を教え日中親善に尽くしたいとの念から、一八九五（明治二八）年に平河町の自宅に学舎を設け、「詠帰舎」と名付けて中国語を教えた。命名は、恩師である勝海舟が「詠而帰」（「論語」先進篇）の扁額を揮毫してくれたことに由来し、以来、自らも詠帰、詠而帰と号するようになった。一八九八（明治三一）年には学舎を平河天神脇へ移築し「善隣書院」と改称、さらに一九〇六（明治三九）年、紀尾井町に新校舎を建設、一九一七（大正六）年、麹町に洋館の善隣書院新校舎を完成させて教育の場を拡大させた。戦前の日本で最も標準的な中国語教科書として知られた『急就篇』を著したのもこの頃である。

またこの時期、詠士が政界の助言者として重んじられたことを示すエピソードがある。一九一九（大正八）年、第一次世界大戦後のヴェルサイユ講和会議に日本全権として赴く牧野伸顕が渡欧に先立ち、この際日本としての会議に提言すべきはなにかと聞いたところ、詠士は傾倒する勝海舟に思いを馳せつつ、「（海舟ならば）来るべき会議に世界人類はその皮膚の色を超越して無差別平等であるべきことを強調せらるゝ、ことと察せられます」と応えた。牧野が会議で上程した「世界人類平等決議案」には、その裏に詠士の助言が秘められていたのである（前

掲石川論文参照）。

一九四〇（昭和一五）年には、多年にわたる教育への功績が称えられ、文部大臣から表彰を受けた。そして一九四三（昭和一八）年に七七歳で亡くなるまで、教育者として中国を真に理解する日本人の育成に努めた。その伝統を継承した善隣書院は、現在も中国語学校善隣書院として代々木の地にある。

一九一七（大正六）年、青年大民団より私塾「国士館」創立を呼びかける「国士館設立趣旨」が発せられるが、そのなかに講師として「宮島大八」（詠士）の名が記されている。国士館では、月曜から土曜まで午後七時から九時までの二時間を基本とし、政治、経済、社会、宗教、哲学、武道、外国語などの科目を各講師が教授したが、詠士も講師のひとりとして孟子などの儒教哲学を講義した。講師のなかには善隣書院での教え子今村貞治もいた。詠士が国士館設立の発起人となり講師を務めるまでに、どのような経緯があったのか、本学に史料が不足しているためまだ不明な点が多い。

書家として名の通っていた詠士だが、師である張廉卿と同じく書の弟子をとることはなかったという。国士館においても、書を教えることはなかった。しかし、詠士

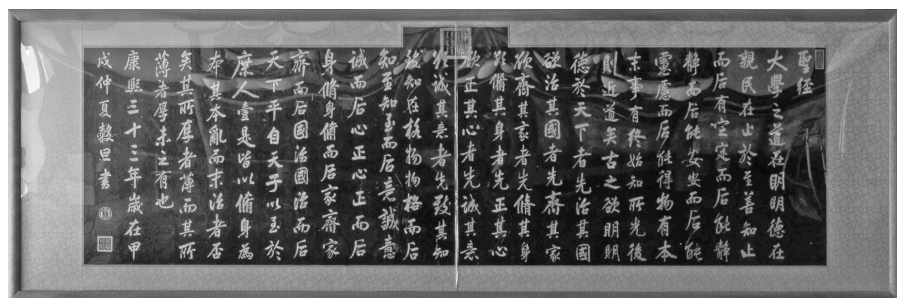


写真2 現在も大講堂内に掛かる「聖經大学」の扁額

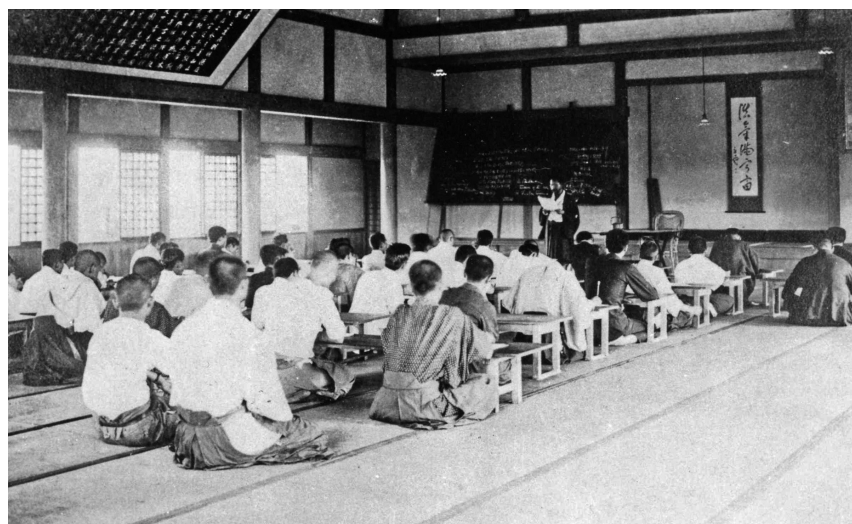


写真3 大正10年頃の講堂内における講義の写真
左上部に「聖經大学」の扁額がみえる

より寄贈されたものに、世田谷キャンパス中央に位置する大講堂に今も掲げられている「聖經大学」の扁額がある。中国歴代の教育機関であった北京国子監に伝存する碑文から採られた拓本で、清朝第四代皇帝康熙帝の行筆である（写真2参照）。国士館高等部第一期生である武田瀨著『国を定めるもの』（学書房、一九八五年）に、「（一九一九「大正八」年）高等部に入学したばかりの私等第一期生が、渋谷から荷車で汗を流しながら運搬したのだ。大望に、胸躍らせ熱意をコメて掲げたものだった。――アノ拓本が、どのような関係から宮嶋^{ミヤジマ}先生の許に來たのかについては存知しない」とある。扁額は詠士より寄贈され、学生たちの手で大講堂内へ掲げられた（写真3参照）。四書の一つ『大学』の冒頭部、「大学の道は明德を明らかにするに有り」で始まる文中には、学問の道とこれに通じる人生訓が説かれている。現在、北京図書館にも同じ拓本が収蔵されているという。

詠士は終生、善隣書院にあつて「人格陶冶」を旨とする教育を行った。宮島詠士の研究者魚住和晃氏によれば「宮島大八を知る人たちが異口同音にしたのが、その国士としての高風であった。――風雲急を告げる日中關係に對して、人類愛の大きな視野から論じてその打開の方策

を提言し、日中兩國を跨つて多くの信望を集めた」（宮島詠士における書法思想）『宮島家三代――宮島詠士の書を中心に――』米沢市上杉博物館、二〇〇五年」という。宮島詠士もまた、先の「國士館設立趣旨」にみられる、「精神教育」を重視することによって将来の指導者たる「智識者」育成を目指す、国士館教育を支えた恩人であった。